

村上春樹「貧乏な叔母さんの話」における改稿の様相

—書くという行為と〈救い〉—
エクリチュール

山根由美恵

はじめに

「貧乏な叔母さんの話」(初出 昭55・12『新潮』)は、村上の第二作目の短編であり、第一短編集『中国行きのスロウ・ボート』(昭58・5、中央公論社)に収録された。これまであまり注目されることはなかったが、村上はこの短編に執心している。平成二年に上梓された『村上春樹全作品 1979～1989 ③』(講談社 以下、『全作品』と記す)では、大幅に改稿を加えた上で、次のように述べている。¹⁾

『中国行きのスロウ・ボート』を書いた経験をもとにして、自分が小説を書くという行為を文章的に検証してみたかったという意味あいもある。小説そのものも二重構造になっている。つまりこれは『貧乏な叔母さんの話』という小説でありながら、同時に「メイキング・オブ・『貧乏な叔母さんの話』」になっているわけだ。これも難しい展開の話だった。僕としてはかなりの意欲作だったのだが、あまりにもテーマが大きくて、駆け出しの作家の手にはあまる部分があった。(後略)

そういうわけで当時も『新潮』の担当編集者と二人でとことん話し合っ手を入れた。何度も何度も議論を重ね、薄紙を重ねるように丁寧に書き直した。でも今回読み直してみると、小説的にクリアではない部分はまだまだ多すぎるように思えた。(中略)そんなわけで、この『貧乏な叔母さんの話』も全集収録にあたって全体的にかなり手を入れた。あ

るいはもつと年をとって、もう一度書き直すことになるかなという気も
しないでもない。これは僕にとつてけっこう重要な意味を持つ短編であ
ったように思う。

右からわかるように、「貧乏な叔母さんの話」は、作家自体が改稿に意欲的であり、更なる改稿の可能性もある事も示唆している、特別な作品である。村上にとつて、『全作品』は一つの実験場としての位置づけがなされている。ただ、全ての作品が改稿されているわけではなく、「風の歌を聴け」「1973年のピンボール」は、不完全さをそのまま残しておきたいとの意向から、「螢」は「ノルウェイの森」への改作の過程で十分手直しをしたとの理由により、そのまま収録されている。『全作品』における改稿には、村上の、作品に対する一つの基準が見える。

近年、山下浩氏の『本文の生態学』(平5・6、日本エディタースクール出版部)を筆頭に、本文^{テクニク}の研究が注目され、近現代文学におけるその重要性が認識されつつある。³⁾ 私は以前処女短編「中国行きのスロウ・ボート」における、単行本版から『全作品』版への改稿の様相について、その「コンセプトの変化」を報告した。⁴⁾ 「中国行きのスロ

ウ・ボート」の単行本版と『全作品』版とでは、物語の方向性が変化させられており、二作はそれぞれ別の作品として捉える必要があるものであった。同じく大幅な改稿がなされている「貧乏な叔母さんの話」ではあるが、「中国行きのスロウ・ボート」における改稿とは性質の異なった改稿がなされているようである。

また、今後、改稿の研究を進めていく上で、作家の書くという行為に着目する必要があるとも考えた。先の「自分が小説を書くという行為を文章的に検証してみたかった」という言には、書くという行為に意識的である作家の姿が窺えよう。

本稿では、「貧乏な叔母さんの話」の改稿の様相を報告し、作家の書くという行為の実態の一端を明らかにしたい。

一 〈貧乏な叔母さん〉とは何か

改稿の様相に先立ち、二作（単行本版・『全作品』版）に共通する作品の枠組みを確認しておきたい。尚、ここでは単行本版から引用することにする。

「貧乏な叔母さんの話」は、小説を書くこうとしている主人公「僕」が「貧乏な叔母さんの話」について書きたいと連れの彼女に話す所から物語は始まる。「僕」にとっては単なる思いつきだったのであるが、実際に貧乏な叔母さんがいる彼女は「彼女について何も書きたくない」と言い、更にあなたにはそれが救えるのかというように（救い）という言葉を用いて、「僕」にその困難さを述べる。

その後、「僕」の背中に〈貧乏な叔母さん〉が貼り付く。この〈貧

乏な叔母さん〉は見るものによってその姿を変えている記号とでもいふべき存在である。

何人かのそういった印象を総合してみると（僕自身には彼女の姿を見ることができなかったから）、僕の背中に貼りついているのはひとつの形に固定された貧乏な叔母さんではなく、見る人のそれぞれの心象に従ってそれぞれに形作られる一種のエーテルの如きものであるらしかつた。

(P 54 10—12)

（前略）僕の背中に貼りついているのも、結局は貧乏な叔母さんということばなんです。そこには意味もなきや形もない。あえて言うなら、それは概念的な記号のようなものです。

司会者はなんだか困ったような顔をした。「意味もなきや形もないとおっしゃいますが、私たちは現にあなたの背中にはつきりと何かしらの姿を見ることができずし、それは我々にそれぞれの意味を生じさせるわけなのですが」

僕は肩をすくめた。「記号とはそういったものでしょう」

(P 59 8—14)

これまで、〈貧乏な叔母さん〉の「記号」性が注目されてきた。川村湊氏は「村上春樹の小説は、ほとんど気まぐれのように感受されたコトバ（たとえば、ピンボール、羊、中国人、貧乏な叔母さんなどの）をめぐるコトバそのものの運動にしかすぎない」としつつ「単なる『記号』のようなもの」が、逆に最も多角的な社会的拡がりを持つ「マス・イメージに変化すること」に村上作品の意味を見出している。

平野芳信氏は「春樹は文学テキストにおける言語の象徴性を拒否していると思われる」と述べ、意味や象徴よりも、記号性に重点を置いて

いる。

両氏の言われるように、〈貧乏な叔母さん〉は、曖昧で明確な意味を持たない「記号」的な存在である。しかし、この〈貧乏な叔母さん〉に一つの方向性、「死ぬ前に既に名前が消えてしまっているタイプ」という性格付けがなされていることは看過できない。つまり、生きていながらも存在感はなく、自己の存在性を他者に認識してもらえない不幸な存在が〈貧乏な叔母さん〉ということばで表されているのである。このような存在を記号という言葉でまとめ、曖昧な概念としてのみ捉えてしまうことには疑問が残る。後の改稿の様相において考察するが、〈貧乏な叔母さん〉のこの特徴こそが、作品の中心となり、作家の小説観と密接に関わっていると考えられる。

そして、〈貧乏な叔母さん〉は、「僕」が「僕自身」を発見する触媒となる。「僕」が〈貧乏な叔母さん〉を背負うようになってから、友人達は「僕」を避けるようになった。ある日「僕」は電車に乗る。そこで意地の悪い弟に自分の帽子をめちやめちやにされかかった少女が強引に帽子を取り返し、弟を泣かせてしまったため母親に叱られるという場面に遭遇する。

僕は膝の上で両手を広げ、長いあいだふたつの手のひらを眺める。まるで何人もの血をたつぷり吸い込んだように、僕の手は暗く汚れていた。僕は隣りでしゃくりあげている女の子の肩にそっと手を置いてみたかったのだけれど、僕の手はきつと彼女を怯えさせてしまっているに違いない。僕の手はこのまま永遠に、もう誰ひとり救うこともできないのだろう。彼女の灰色のフェルト帽のつばをなおしてやることができないように。

(P 70 5-10)

「僕」は泣いているたった一人の少女すら救えない自分の無力さを痛感する。この後〈貧乏な叔母さん〉は「僕」の背中から去っていく。

彼女はやってきた時と同じように、誰に気取られることもなく僕の背の中からそっと立ち去っていた。これからどこに行けばいいのか僕にはわからない。砂漠のまんまに立った一本の意味のない標識のように僕はひとりぼっちだった。僕はポケットの小銭を洗いざらい公衆電話に放り込んで、彼女のアパートの番号を回した。八回ベルが鳴って、九回めに彼女が出た。

「寝てたのよ」と彼女はぼんやりした声で言った。

「夕方の六時に？」

「昨日の夜から仕事はずっとつまっている、やっと片づいたのがつい二時間前なの」

「起こしちゃって悪かったな」と僕は言った。「ただ本当に君が生きているかどうか確かめなかったんだ。うまく説明できないんだけど」

(P 71 2-10)

〈貧乏な叔母さん〉が「僕」の背中から離れ、「僕」は「ひとりぼっちだった」という孤独感に襲われる。その時「僕」は彼女に電話し、いかに自分にとって彼女の存在が大きいかを認識する(これは後の「ノルウェイの森」の結末を想起させる)。「僕」が「僕自身」の無力さと一番大切な物を認識する契機として〈貧乏な叔母さん〉の存在を捉えることができるだろう。

二 「貧乏な叔母さんの話」における改稿の様相

先に、「貧乏な叔母さんの話」は、「僕自身」発見物語という枠組みであることを確認した。ここで注目したのは、〈貧乏な叔母さん〉の存在と関わって出てくる〈救い〉と「僕」が小説を書く人間であり、その経緯が作品になっている作中作という二重構造である。

これまで、後者の二重構造について論じられている。前述の平野氏は「春樹の方法論が意識的には言葉の先鋭化から『ストーリー・テリング』の方向に転換を遂げたことが、無意識にパターンとしての型にスライドし依存していくことであつたことを、はからずも物語のかたちをかりて、我々の前に指し示した里程碑マイルストーンであつた」と論じ、玉村周氏は「本作品は、春樹の何らかの小説の方法論ととるべきだろう」と、この二重構造は作家の方法論として捉えられてきた。

確かにこの作中作であることが村上の執心の理由であると考えられる。ただ、この作中作という構造は、先の〈救い〉と密接に関わり、そこには作者の小説観が垣間見える。それは、改稿された『全作品』版に色濃く表されている。方法論だけではなく、小説観も作家がこだわる重要な要因なのではないか。

以下、〈救い〉に焦点を絞り、改稿の意味を述べていきたい。なぜなら、1章・3章・4章が集中的に改稿されており、これらの章は〈救い〉と密接に関わっている場面であるからである。尚、改稿の全貌は末尾の改稿対応表として掲載した。

1 小説と〈救い〉——1章——

単行本版から『全作品』版への改稿の傾向の一つに、主人公「僕」が「僕は小説を書こうとしている人間なのだ」(『全作品』版のみの表現 P 44 16—17)と作家的な人物として強調されている点がある。その上で、「僕」は理由にこだわる性格付けがなされる。

「それでも書いてみたいのね？」

「仕方ないんだ」と僕は弁解した。「うまく説明できないけどね。……たしかに僕は間違つたひきだしを開けちまつたのかも知れない。でもね、結局のところ、ひきだしを開けたのは僕なんだ。つまりは、そういうことさ」(単 P 47 9—12)

「じゃあどうしてそんなものこと書きたいの？」

「それは言葉ではうまく説明できないことなんだ」と僕は言った。「僕がどうして貧乏な叔母さんについての小説を書くかという理由を説明するためには、それについて小説を書かなくてはならないし、それについて小説を書いてしまえば、その小説を書く理由を説明する理由もなくなってしまうんじゃないかな」(全 P 45 6—9)

「僕」は理屈や「理由」にこだわる人間像へと変化させられ、この「理由」にこだわる性格は後への伏線となる。

「僕」が彼女に「貧乏な叔母さん」の話を書きたいと告げたとき、彼女は〈救い〉という言葉で「僕」に覚悟を迫る。単行本版ではこの〈貧乏な叔母さん〉と〈救い〉のやりとりがやや唐突な感があるが、『全作品』版では論理的なやりとりへと変化させられている。

「私にはわからないわ」ずいぶんあとで彼女はぼつんとそう言った。

(単 P 48 15)

「実を言うと、その貧乏な叔母さんについては、私にもいろいろ言いたいことがあるような気がするの。でも私にはそれについての正しい言葉を書きつづけることができない。私には歯がたたない。私は本当の貧乏な叔母さんを知っているから」そう言って彼女は軽く唇を噛んだ。「それはおそらくあなたが思っているよりはずっと遠いところまで根を張っているよ」(全 P 46 11-15)

「今のあなたには何ひとつ救えないんじゃないかって気がするのよ。何ひとつね」

僕はため息をついた。

「めんなさい」

「いや、いいんだ」と僕は言う。「きつと今の僕には安物の枕ひとつ救えないのかもしれない」(単 P 49 4-8)

「あなたは貧乏な叔母さんについて書こうとしてる」と彼女は言った。「あなたはそれを引き受けようとしている。そして、私は思うんだけど、それを引き受けるといえるのは、同時にそれを救うことでもあるのよ。でも今のあなたにはそれができるかしら。あなたには本物の貧乏な叔母さんさえないのよ」(全 P 46 18-P 47 1)

単行本版では曖昧だったが、『全作品』版では〈貧乏な叔母さん〉と「僕」の存在がリンクし、小説を書くことが「救う」ことと同義であると述べられている。彼女は〈貧乏な叔母さん〉、すなわち自己の存在性を他者に認識してもらえない存在を実際に書くことの困難性を「僕」に告げている。換言すると、自己の存在性を他者に認識しても

らえない存在に目を向け、それを小説にし、受け入れ、更に救うことができるのかと「僕」に問うているのである。〈貧乏な叔母さん〉ということば(概念的な記号)で表されてはいるが、彼女の問題提起によつて、「僕」は小説を書くことの意味を自分自身に問うことを迫られる。「自分が小説を書くという行為を文章的に検証してみたかった」という村上の言葉も考え合わせると、「僕」のみならず、この問題提起は作家自身にとつても同様の問いとなる。このことを説明的すぎるほどに明確化する方向へと『全作品』版は改稿されている。そのことは、村上が強調したいことがこの〈救い〉であり、〈救い〉こそが「貧乏な叔母さんの話」という作品の一つの核であることを如実に示していると考えられまいか。

2 理由と存在―3章―

1と同様に、単行本版での漠然とした曖昧なやりとりは『全作品』版で論理的(説明的)な会話へと変更させられる。

彼女の問題提起を受け、「僕」は実際に〈貧乏な叔母さん〉を背負うわけだが、友人たちは皆「僕」を避け、「僕」は孤独におちいる。この孤独においても、「僕」はまだ〈貧乏な叔母さん〉を受け入れるということがどういう意味を持つのかわからない。先に触れたように、「僕」は「意味」「理由」に拘っているからである。

「なんだか小説を書く意味なんて何もないような気がするんだ。君がいつか言ったように、僕に何ひとつ救えないんだとしたらね」

(単 P 63 7-8)

← 「君がいつか言ったように、僕に何ひとつ救えないんだとしたら、僕が貧乏な叔母さんについて何かを書く意味なんてどこにあるだろう？」

(全 P 58 17—18)

「彼女は存在するのよ、それだけ」彼女はそう言った。「あとはあなたがそれを受け入れるかどうかでこと」(単 P 64 9—10)

← 「彼女は存在するのよ、それだけ」彼女はそう言った。「あなたはそれを認めて、受け入れなくちゃいけない。理由も原因も、そんなものはどうでもいいことなのよ。貧乏な叔母さんはただそこに存在するのよ。貧乏な叔母さんというのは、その存在そのものが理由なのよ。私たちが特別な理由も原因もなくこうして今ここに存在しているのと同じことなのよ」

(全 P 59 18—P 60 1)

「意味」「理由」にこだわる「僕」は〈貧乏な叔母さん〉についても何も書けない自分自身に対し、絶望しかかっている。「僕」は、自己の存在性を他者に認識してもらえない存在に目を向けることの困難さと小説による〈救い〉の偽善性を認識したと言えるだろう。彼女はそういう表面の理屈を捨てるのが重要であることを「僕」に説く。〈救い〉とは、意味や理由の追及で解決できるようなものではなく、対象を認識することこそがその第一歩であるからである。これは困難さを認識した上で、小説の可能性を「僕」に説いていることにもなる。それは、単行本版では「小説を書く意味なんて何もないような気がする」と小説全体を指していたものが「貧乏な叔母さんについて何かを書く意味」と限定されていることにも言える。小説(文学)の可能性

性を残していることは、最後に「僕」が「貧乏な叔母さんたちの桂冠詩人」となりたいと願う場面に繋がる。

3 無力さの自覚—4章—

これまで、曖昧な会話が説明的なやりとりへと変更され、小説を書く事とその〈救い〉が強調されている様相を論じてきた。ここでは別の特徴の一つである「僕自身」の強調という点を述べていきたい。

「中国行きのスロウ・ボート」における改稿と同様に、「僕自身」への焦点化という傾向が「貧乏な叔母さんの話」においても見られる。顕著なのは、少女の「平凡さ」を一般化していた単行本版の描写が『全作品』版で削除され、代わりに「僕自身」の無力さを強調し、あくまで「僕」の問題として焦点化している所にある。尚、ここでは便宜的に削除部分を行書体太字で示すことにする。

彼女は平凡な顔立ちの少女だった。おそらく彼女ととりまく平坂さまがまるで煙のような彼女の顔に沈み込んでしまったのだろう。ふっくらとした表情に漂うこの年代の少女特有の透明感も、思春期を迎えるころには鈍い肉づきの中にすっかり消え失せてしまうことだろう。僕には彼女のそんな姿と、帽子のしわと伸ばしながから少女から大人へと成長していく姿と想像することができた。

僕はガラス窓に頭をもたせかけたまま目を見て、これまでに通り会ってきた何人かの女友たちの顔と思い浮かべてみた。そして彼女たちが残していった切れざれを言葉や、なんでもない仕事や、波や足音の形と思い浮かべてみた。彼女たちは今、いったいどのような人生と通っているのだろうか。あるいは彼女たちの何人かは晴雨の中で迷いまどいながら夜の森の奥へ奥へと吸い込まれていく子供たちのように、知らず知らず晴い道と通りつづけているのかもしれない。そんな漠然とした悲しみを

が、車内灯の黄色い光の中に蛾の銀粉のように舞っていた。僕は膝の上で両手を広げ、長いあいだふたつの手のひらを眺める。まるで何人もの血をたつぷり吸い込んだように、僕の手は暗く汚れていた。

僕は隣りでしゃくりあげている女の子の肩にそっと手を置いてみたかったのだけれど、僕の手はきつと彼女を怯えさせてしまっているに違いない。僕の手はこのまま永遠に、もう誰ひとり救うこともできないのだろう。彼女の灰色のフェルト帽のつばをなおしてやることができないうように。

(単 P 69 12—P 70 10)

時刻はもう夕方に近かった。車内灯のほんやりとした黄色い光がまるで哀しげな蛾の鱗粉のようにあたりをちりちりと舞っていた。それは宙を漂い、人々の鼻や口から音もなく体内に吸い込まれていった。僕は本を閉じ、膝の上に両手を置いて、長いあいだ自分の手のひらをじつと眺めた。自分の手のひらをそんなにじつくりと見るのは、考えてみればずいぶん久しぶりのことだった。車内灯のくすんだ光の下では、僕の手はいやに黒ずんで汚れていた。それは自分の手には見えなかった。そのことは僕を哀しい気持ちにさせた。その手はどう見ても、この先誰かを幸せにできるような手には見えなかったからだ。誰かを救うことができる手のように見えなかったからだ。僕は隣の席でしゃくりあげている女の子の肩に手を置いて慰めてやりたかった。君のやったことは全然間違っていないし、帽子を奪いかえしたときのあの手際なんて実にはいたものだったよと言ってやりたかった。でももちろん僕は彼女に手も触れなかったし、何も言わなかった。そんなことをしたら、彼女はもっと混乱してもっと怯えてしまったことだろう。それにだいいち、僕の手はこんなに黒く汚れてしまっているのだ。(全 P 64 4—14)

単行本版では、少女は一般化され、平凡な少女たちの悲しみに「僕」が共鳴し、自らの無力さを痛感するといった展開になっているが、『全作品』版では少女への考察が削除される。少女たちの「悲しみ」は消え、哀しげな車内灯の光という情景描写へと変化し、そのまま「僕」

の無力さへと繋がっている。代わりに、「僕」の無力さ、手の汚れに焦点が定まっている。

「中国行きのスロウ・ボート」論においても記したが、この時期の村上は内化の方向に意識が向いていたため、「僕自身」の追求といった傾向が出てしまうようである。

ここで今回触れられなかった改稿点について列挙しておく。

- ・彼女が煙草を吸う人物に変化。(後の仕事に夢中である像とあわせて、積極的な女性像に変化する)
- ・貧乏な叔母さん騒動において、単行本版の「僕」は吐き捨てるように述べていたが、『全作品』では現象をより前向きに捉えるよう変化する。
- ・司会者像に悪意が増す。
- ・テレビのトーク・ショーの意味のなさが強調される。
- ・親子を観察する「僕」の目は単行本版では冷静であったが、『全作品』版では弟の意地の悪さが増し、女の子への「僕」の共感が加わる。
- ・彼女に対する「僕」の依存度が高くなる。

『全作品』版の改稿の特徴は、作家の言いたい事を鮮明に打ち出すといった方向性を持つことである。小説による(救い)といった問題を全面に出すために曖昧だった会話は説明的なやり取りへと変化し、「僕」自身の無力さに焦点を定めるため、少女たちの考察は削除された。その他の改稿点からは、トーク・ショウ、司会者、少女の弟らが悪役としての性格付けがなされ、そのことによって少女や「僕」や彼女が相対的に善的なものとして印象づけられている。作家としてメッセージを明確にすることがこの『全作品』版の改稿であったといえる。ただ、言いたい事が先にあり、それを明確化することが目的となっていて感がある。『全作品』版を読めば、単行本版で漠然としていたテ

「ママが理解できる。しかし、作品として不自然さは免れない。物語性の変化（「コンセプトの変化」）という改稿ではないが、単行本版を理解する上で別に捉えるべき存在であると考えられる。

最後に二重構造について付け加えておきたい。村上の述べている「二重構造」とは、『貧乏な叔母さんの話』という小説でありながら、同時に「メイキング・オブ『貧乏な叔母さんの話』」になっているという作中作であることである。ここで確認しておきたいのは、小説を書くという行為が強調されていることで、作中には別の二重構造が存在することである。それは、創造主と創造されたものが同時存在するという二重構造である。この後者の二重構造は、「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」に繋がる要素を有している。

「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」の母胎は、これまで「街と、その不確かな壁」（昭55・9『文學界』）のみで捉えられてきた。「街と、その不確かな壁」は「貧乏な叔母さんの話」の三ヶ月前に書かれた中編である。二重構造や、「一角獣」の登場と「ことば」の強調というモチーフの共通性を考えると、「貧乏な叔母さんの話」「街と、その不確かな壁」「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」とには密接な繋がりがあると考えられる。これらについての考察は別稿で述べたい。

おわりに

「中国行きのスロウ・ボート」における改稿は、マイノリティや

東アジアの問題を鋭く問題提起していた単行本版が、『全作品』版において中国人像を自意識の像へと変化させ、曖昧にさせた点に「コンセプトの変化」が見られた。³³⁾

この「貧乏な叔母さんの話」の改稿は、僕自身の強調という面も見られるが、他者に認識してもらえない存在に目を向けることとその困難さを強調するという所に改稿は集中していた。小説を書く者として、小説を書き、そのことによって何か（救えるのか）といった問題が作品には込められている。その問題が明確化された『全作品』版において、書くことで救うという考えの持つ偽善性や泣いている少女を慰めることすらできない「僕」の無力さが述べられてはいるが、最後に「僕」が「貧乏な叔母さんたちの桂冠詩人」となりたいと願う場面には、文学の可能性も残されている。こういった作家の小説観がこの作品の核であり、村上の作家としてのこだわりであり、更なる改稿の可能性を示唆する理由であったのではないだろうか。

注(1)「自作を語る 短編小説への試み」(村上春樹全作品 1979～1989)

③ 平成2・9、講談社

(2)『全作品』収録に際し、村上は短編56編を改稿した。平成14・11に刊行を終えた『村上春樹全作品 1980～2001』(全七巻、講談社)には、未発表作品1編、改稿作品44編が収録された。村上が『全作品』という場を書き下ろしとは違った母胎として認識し、実験を試みていることは間違いない。特に第一短編集『中国行きのスロウ・ボート』の改稿に対して村上は次のように述べている。引用は注1に同じ。

今回全集に収録するにあたって、いくつかの短編にはかなり大幅に手を入れることにした。これは今の時点で読み返してみても

- になる部分が多々あったからである。僕は原則的に一度発表した作品にはそれ以上手を加えないことにしている。何故ならそれをやり始めるときりがないし、また作品というものはたとえいささかの欠点があつたとしても（あるいは作家がそれを気に入らないと思つたとしても）、定観測的な意味を持つひとつの資料として、オリジナルのかたちのもはやはりきちんと残しておくべきだと考えているからである。しかし今回は全集という形で出版であり、単行本のオリジナルとヴァージョンとは違うもうひとつ別の選択肢を提供できるまたとない機会であつたので、思い切つて改訂を加えることにした。大幅に手を加えたものもあれば、字句表現の修正程度にとどまつたものもあつた。
- (3) 『日本近代文学』最新号(平15・10)において、『本文』の生成／『注釈』の力学」という特集が組まれた。本文研究は、近現代文学研究において、一つの重要な分野であると考えられる。
- (4) 拙稿『村上春樹『中国行きのスロウ・ポルト』における改稿の様相—Textual Criticism に向けた一試行—』(平15・7『Problematic』)
- (5) 『書評『中国行きのスロウ・ポルト』』(昭58・8『群像』)
- (6) 『貧乏な叔母さんの話』物語のかたちをした里程標』(平10・2『国文学』臨時増刊)
- (7) 『村上春樹作品研究事典』(平13・6、鼎書房)
- (8) 注4に同じ。「中国行きのスロウ・ポルト」における、改稿の最も顕著な特徴は、「僕」自身の強調であつた。
- (9) 「貧乏な叔母さんの話」と「街と、その不確かな壁」「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」との共通点について、二点触れたい。
- 既に深海遙氏が『「貧乏な叔母さんの話」で描かれた絵画館前の一角獣の銅像は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の一角獣へとつながっている」と指摘しているように(『探訪 村上春樹の世界』平10・3、ゼスト)、作中には「街と、その不確かな壁」、「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」を想起させる一角獣の像が登場する。「僕は散歩の帰り、絵画館前の広場に腰を下ろし、連れと二人で「一角獣の銅像をぼんやり見上げていた」、僕は類

杖をつき、煙草を口にくわえたままもう一度一角獣の銅像を見上げる。「頭の一角獣はどこかに置き去りにされた時の流れにむけて、苛立たしげに四本の前足を振り上げていた」ここでの一角獣は単なる情景描写ではなく、(貧乏な叔母さん)の誕生する場として設定されている。

- 二点目は、(貧乏な叔母さん)は概念・ことば、記号であるということである。これは「街と、その不確かな壁」の中心であつた「ことば」との関係が想起される。「街と、その不確かな壁」は「ことばは死ぬ」というフレーズが何度も繰り返されている。
- (10) 注4に同じ。

*本文は『中国行きのスロウ・ポルト』(昭58・5、中央公論社)、『村上春樹全作品 1979～1989 ③』(平2・9、講談社)による。傍線・文字囲いは私に伏した。

(やまね ゆみえ、鈴峯女子短期大学非常勤講師)

〈対応表 凡例〉

○本文は『中国行きのスロウ・ポルト』(昭58・5、中央公論社)、『村上春樹全作品 1979～1989 ③』(平2・9、講談社)を用いる。頁数、行数はこれらに対応する。

○削除は、対応部分が削除されていることを示す。挿入は、挿入されている直前の部分を記し、挿入という記号の後の部分が実際に挿入されているものである。

「貧乏な叔母さんの話」改稿対応表

		単行本	全作品
		1	
P 45	3 6	<p>7-10</p> <p>そもその始めは七月のある晴れた午後だった。とびつきり気持の良い日曜日の午後だ。芝生の上に丸めて捨てられたチョコレート包装紙でさえ、そんな七月の王国にあつては湖の底の水晶のように誇らし気に光り輝いている。不透明で優し気な光の花粉がはにかみながら、ゆっくりと地表に舞い下りていた。</p>	<p>P 43</p> <p>2 9</p> <p>そもその始まりは、文句のつけようなく見事に晴れあがつた、七月の日曜日の午後だった。七月の最初の日曜日だ。小さな雲の塊りが二つか三つ、よく吟味された品の良い句読点みたいに、ずつと遠くの空に白く浮かんでいた。太陽の光は何物にも遮られずに、心おきなく世界に降り注いでいた。芝生の上に丸めて捨てられたチョコレート包装紙でさえ、そんな七月の王国にあつては、湖底の伝説の水晶のごとく誇らし気に光り輝いていた。じつと見ていると、箱の中に箱がある仕掛けのように、光の中にもうひとつ別の光があることがわかった。その光の中の光は、まるで無数の細かい花粉のように見えた。不透明な、柔らかな花粉だった。それらは空中をあてもなく漂い、やがてゆっくりと時間をかけて地表に舞い下りていった。</p>
P 45	7 P 46	<p>5</p> <p>絵画館前の広場に腰を下ろし、連れと二人で一角獣の銅像をぼんやり見上げていた。梅雨が明けたばかりの爽やかな風が緑の葉を震わせ、浅い池の水面に小さな波を立てていた。澄んだ水の底には錆びついたコーラの罐がいくつも沈み、それはずつと昔に打ち捨てられた街の廃墟を思わせた。揃いのユニフォームを着た何組もの草野球チームや、犬や貸自転車や、ジョギング・ショーツをはいた外人の青年が、池の縁に腰を下ろした僕たち二人の前を横切っていった。誰かが芝生の上に置いたラジオから、砂糖を入れすぎたコーヒーのような甘たらいポップソングが風に乗って微かに聞こえていた。失われた愛だとか、失われそうな愛だとかについての歌だ。太陽の光が僕の両腕に静かに吸い込まれていく。</p>	<p>P 43</p> <p>10 P 44</p> <p>5</p> <p>絵画館前の広場に寄った。そして池の縁に腰を下ろし、連れと二人で何をするともなく、向い側にある一角獣の銅像を眺めていた。長い梅雨がやつと明けたばかりだった。新しい夏の風が緑の葉を微かに震わせ、浅い池の水面に時折小さな波を立てていた。時間はそんな風に動いては止まり、止まっては動いた。澄んだ水の底にはコーラの缶がいくつも沈んでいた。それは僕に水没してしまった古代の街の廃墟を思わせた。揃いのユニフォーム姿の草野球チームの一団や、自転車に乗った子供や、犬を連れた老人や、ジョギング・ショーツをはいた外人の青年が、僕らの前を横切っていった。芝生の上に置かれた大型のトランジスタ・ラジオから、甘たらいメロディーのポップソングが風に乗って微かに聞こえてきた。失われた愛だとか、失われそうな愛だとかについての歌だった。どこかで前に聞いた覚えがあるようなメロディーだったが、たしかに聞いたという確信は持てなかった。それはただ別の何かに似ているだけなのかもしれない。僕はぼんやりとその音楽に耳を傾けていた。太陽の光が僕のむきだしの両腕に吸い込まれていくのを感じることができた。音もなく、とても穏やかに、静かに。僕は時折腕を顔の前にあげて、まっすぐのぼして見た。夏がやってきたのだ。</p>
P 46	6 9	<p>6 9</p> <p>そんな午後になぜ貧乏な叔母さんが心を捉えたのか、僕にはわからない。まわりには貧乏な叔母さんの姿さえなかった。それでもそのわずか何百分の一秒かのあいだ、彼女は僕の心の中にいたし、その冷やりとした不思議な肌ざわりはいつまでもそこに残っていた。</p> <p>貧乏な叔母さん？</p>	<p>P 44</p> <p>6 12</p> <p>そんな日曜日の午後、なぜよりよって貧乏な叔母さんが僕の心を捉えたのか、僕には見当もつかない。まわりには貧乏な叔母さんの姿はなかったし、貧乏な叔母さんの存在を想像させる何かさえなかった。でもそれにもかかわらず、貧乏な叔母さんはやってきて、去っていった。わずか何百分の一秒かのあいだであるにせよ、彼女は僕の心の中にいた。そして彼女はそれと不思議な人型の空白を残していった。まるで窓の外を誰かがさつと通り過ぎ</p>

<p>P 46 10—11 ことばは風のように、あるいは透明な弾道のように、</p>	<p>P 44 13—14 彼女はそのまま見えなくなってしまうような感じだった。急いで窓のところに飛んでいつて顔を出す。でもそこにはもう誰もいない。 貧乏な叔母さん？</p>
<p>P 46 13 P 46 14—16 「貧乏な叔母さんについて何かを書いてみたいんだ」僕は連れにむかってそう言ってみた。 彼女は『貧乏な叔母さん』ということばを小さな手のひらに載せて何度か転がしてから、よくわからないといった風に肩をすぼめた。「どうして 貧乏な叔母さんなの？」</p>	<p>P 44 16—17 「僕は貧乏な叔母さんについて書いてみたい」僕は連れに向ってそう口に出してみた。僕は小説を書くとうとしている人間なのだ。 P 44 18—19 彼女は何かを測るような目でしばらく僕の顔を見ていた。「どうしてかしら？ どうして貧乏な叔母さんなの？」</p>
<p>P 46 17—P 47 1 僕にもわかりはしない。小さな雲の影みたくに何かかふと僕の中を通りすぎていった、それだけのことだ。</p>	<p>P 44 20—P 45 1 僕にだってわかりはしない。どういうわけか、僕を捉えるのはいつもわからないものなのだ。</p>
<p>P 47 2「ただそう思ったのさ。なんとなくね」</p>	<p>削除</p>
<p>P 47 3—4 僕たちは長いあいだ、ことばを探してずっと黙り込んでいた。地球の回転する優しい音だけが、僕と彼女の心を結んでいた。</p>	<p>P 45 2—3 それからしばらく僕らは黙っていた。僕はそのあいだ胸の中に残された人型の空白を指でなぞっていた。</p>
<p>P 47 5—6 「あなたが貧乏な叔母さんの話を書くの？」 「そう。僕が貧乏な叔母さんの話を書くんだ」</p>	<p>削除</p>
<p>P 47 7—12 「そんな話、誰も読みたがらないかもしれない」 「そうかもしれない」と僕は言った。 「それでも書いてみたいのね？」 「仕方ないんだ」と僕は弁解した。「うまく説明できないけどね。……たしかに僕は間違ったひきだしを開けちまったのかもしれない。でもね、結局のところ、ひきだしを開けたのは僕なんだ。つまりは、そういうことさ」</p>	<p>P 45 4—9 「そんな話、誰も読みたがらないかもしれないわよ」と彼女は言った。 「たしかに読物物としては魅力的じゃないかもしれない」と僕は認めた。 「じゃあどうしてそんなものを書くの？」 「それは言葉ではうまく説明できないことなんだ」と僕は言った。「僕がどうして貧乏な叔母さんについての小説を書くかという理由を説明するためには、それについて小説を書かなくてはならないし、それについて小説を書いてしまえば、その小説を書く理由を説明する理由もなくなってしまうんじゃないかな」</p>
<p>P 47 13—14 微笑んだ。僕はポケットからくしゃくしゃになった煙草をひっぱり出して火を点ける。</p>	<p>P 45 10—12 微笑み、ポケットからくしゃくしゃになった煙草をひっぱり出して火を点けた。彼女はいつも煙草をくしゃくしゃにしてしまう。ときどきあまりにもくしゃくしゃで火がつかないことだ。でも今回はちゃんと火がついた。</p>
<p>P 48 2 「うん」 P 48 3 「でも私は彼女について何も書きたくなんかない」</p>	<p>削除 P 45 15 本物よ。挿入 本物の貧乏な叔母さん。</p>

<p>P 48 4—8</p>	<p>違った歌を流し始めた。世の中はきつと失われた愛や、失われそうな愛で充ちているのだろう。 「さて、あなたには貧乏な叔母さんなんて一人もいない」と彼女はことばを続けた。 「それでも貧乏な叔母さんについて何かを書いてみたいと思う。不思議だと思わない？」 僕は肯く。「何故なんだらう？」</p>	<p>P 45 19—P 46 4</p> <p>僕は彼女の目を見た。彼女の目はいつものようにとても静かだった。「でも私はその叔母さんについて何も書きたくなんか無い」と彼女は言った。「ひとことも書きたくない」</p>
<p>P 48 9—10</p>	<p>後を向いたまま、細い指先を長いあいだ</p>	<p>P 46 5</p> <p>後ろを向いたまま、細い指先を</p>
<p>P 43 11</p>	<p>いくような気がした。</p>	<p>P 46 6</p> <p>いくようだった。</p>
<p>P 48 11</p>	<p>あの池の底には僕のクエスチョン・マークが、丁寧に</p>	<p>P 46 7</p> <p>あの水底には僕のクエスチョン・マークが、</p>
<p>P 48 13</p>	<p>コーラ罐にむかつて</p>	<p>P 46 8</p> <p>コーラ缶に向って</p>
<p>P 48 14—16</p>	<p>何故？ 何故？ 何故？ 「私にはわからないわ」ずいぶんあとで彼女はぼつんとそう言った。 僕は頬杖をつき、煙草を口にくわえたままもう一度</p>	<p>P 46 10—16</p> <p>何故だらう？ 何故だらう？ 何故だらう？ 彼女はくしゃくしゃの煙草の先からくしゃくしゃの灰を地面に落とした。「実を言うと、その貧乏な叔母さんについては、私もいろいろ言いたいことがあるような気がするの。でも私にはそれについての正しい言葉を思いつくことができない。私には歯がたたない。私は本当の貧乏な叔母さんを知っているから」そう言って彼女は軽く唇を噛んだ。「それは、おそらくあなたが思っているよりはずっと遠いところまで根を張っているのよ」 僕はもう一度</p>
<p>P 48 17</p>	<p>時の流れにむけて、</p>	<p>P 46 16</p> <p>時の流れに向けて、</p>
<p>P 49 1—3</p>	<p>「私にわかつているのは、人は頭の上にお盆を載せたまま空を見上げることはできないってことだけ」と彼女は言った。「あなたのことよ」</p>	<p>削除</p>
<p>P 49 4—9</p>	<p>「今のあなたには何ひとつ教えないんじゃないかって気がするのよ。何ひとつね」僕はため息をついた。 「ごめんなさい」 「いや、いいんだ」と僕は言う。「きつと今の僕には安物の枕ひとつ教えないのかもしれない」 彼女はもう一度微笑んだ。「それにはあなたには貧乏な叔母さんさえないない」</p>	<p>P 46 18—P 47 4</p> <p>「あなたは貧乏な叔母さんについて書こうとしてる」と彼女は言った。「あなたはそれを引き受けようとしてる。そして、私は思うんだけど、それを引き受けるというのは、同時にそれを救うことでもあるのよ。でも今のあなたにはそれができるかしら。あなたには本物の貧乏な叔母さんさえないないのよ」 僕は深いため息をついた。 「ごめんなさい」 「いや、構わないよ。たぶんそのとおりなんだと思う」と僕は言った。</p>
<p>2</p> <p>P 50 1</p> <p>不思議な共通項だ。</p>	<p>不思議な共通項だ。</p>	<p>P 47 9</p> <p>奇妙な共通項だ。</p>

P 50	12	ボーリング・トロフィーと一緒に捨て去られたはずだ。	P 48	2-3	わけのわからないトロフィーなんかと一緒に捨て去られてしまったはずだ。
P 50	14	どことなく心許ない。	P 48	5	心許ない。
P 51	14	ないんだから」	P 49	2	ないんですから」
P 52	7-8	ブライドとともに	P 49	11	ブライドをおもいにして
P 52	13	無用のもの、立ち入るべからず。	P 49	16	無用のもの、立ち入るべからず。
P 53	8	二三日	P 50	6	二、三日
P 53	13	「これといつて害もないんだから」	P 50	12	「おとなしいものだし、これといつて害もないんだから」
P 53	15-17		P 50	14-16	
		「うん」			「なるべく見ないようにしてればいい」
		「いったいどこでそんなもの背負いこんできたんだ？」			「まあさ」と彼は言つて溜め息をついた。「でもいったいどこでそんなもの背負いこんできたんだ？」
		「どいでもないさ」			「とくにどいでもないんだ」
P 54	1	「わかるよ。昔から	P 50	18	「わかるような気がするな。お前、昔から
P 54	4	辛気臭いんだ？」	P 51	1	辛気臭いだろう？」
P 54	6-7		P 51	3-4	
		「なぜだろう？」			「それはどうしてだろう？」
		「なぜって……」			「どうして……」
P 54	7	うちの	P 51	4	たぶんうちの
P 55	2	「うーん」			
P 55	5	「さあ知るもんか。	P 51	16	「知るもんか。
P 55	6	地獄さ」	P 51	17	あれはすさまじい臭いだったな」
P 55	13	あいかわらず	P 52	4	相変わらず
P 56	1-2	どうもなつかしいな、なつかしいというか、	P 52	9	どうも懐かしいな。懐かしいというか、
P 56	12	座席表が形作られていく。	P 52	20	座席表が、形作られていく。
P 56	14	歯が抜ける	P 53	2	歯が欠ける
P 57	2	歯医者椅子にでもなつてしまったような気がしたものだ。	P 53	6	歯医者椅子にでもなつてしまったような気がした。
P 57	4	偶然顔をあわせても	P 53	7	顔を合わせても
P 57	5	一人の女の子は正直に	P 53	8-9	ある女の子はとても言いにくそうに、でも正直に
P 57	6-7				削除
		僕のせいじゃないよ。			
		わかってるわ、彼女はそう言つて具合悪そうに笑つた。			
P 57	8	何かだとしたらまだ我慢できる	P 53	9-10	何かだとしたら、私もまだ我慢できる
P 57	9	傘立て。	P 53	11	傘立て。
P 57	10-15		P 53	12-18	
		もともと人づきあいは苦手な方だし、何にせよ傘立てを背負つて生きていくことを思えば、今のほうがずっとましじゃないか。			もともとあまり人と付き合うのは得意な方ではない。それに僕は傘立てを背負つて生きていくたくなんかない。

<p>P 57 16 17 スタジオに</p> <p>P 57 17 P 58 1</p> <p>司会者は向う側が透けて見えそうな中年のアナウンサーだ。きつと一日に六回くらいは歯を磨くのだろう。</p>	<p>そんな風に友だちは僕を避けなければ、そのかわりにマスコミが競って僕のところへ取材にやってきた。その多くは週刊誌だった。彼らは一日おきにやってきて僕と叔母さんの写真を撮り、彼女の姿がうまく写らないといつては腹を立て、見当違いな質問を山と浴びせかけて帰っていった。もともと僕自身はそんな記事が載った雑誌なんて開きもしない。読んでいたらきつと首をくくりたくなくなったことだろう。</p>
<p>P 58 2 9</p> <p>「それでは今朝のゲストの……さんです」</p> <p>拍手。</p> <p>「おはようございます」</p> <p>「おはようございます」</p> <p>「えー、……さんはふとしたことで背中に貧乏な叔母さんを背負うことになられたわけですが、そのあたりの経過とか御苦労話をひとつ……」</p> <p>「実は苦労というほどのものでもないんです」と僕は言う。「重いわけでもないし、飲み食いするわけでもありませんから」</p>	<p>P 53 20 P 54 5</p> <p>まわりではわけのわからない連中が、わけのわからないことをやっていた。僕はそのままスタジオのドアを開けて帰ってしまいたくなかった。でも帰ろそびれているうちに、僕の番が来てしまった。司会者はカメラに映っていないときはひどく不機嫌で傲慢な男だった。ことあるごとにまわりの人間をいじめていた。僕は一目でその男が嫌いになった。でもひとたびカメラに赤いランプがつくと、彼は豹変した。彼はにこやかでインテリジェントな、感じのいい中年男になった。</p>
<p>P 58 15 17</p> <p>「あなたがお座りになった池の中に、その貧乏な叔母さんがひそんでいて、あなたの背中にとりついたというわけですか」</p> <p>僕は首を振った。結局みんなが求めているのは笑い話か二流の怪談なんだ。</p>	<p>P 54 18 P 55 1</p> <p>「あなたが池の縁にお座りになったところが、その池の中に、貧乏な叔母さんがひそんでいて、あなたの背中にとりついたというわけですか」</p> <p>違います、と言って僕は首を振った。やれやれと僕は思った。やっぱりこんなところに来るべきじゃなかったんだ。結局みんなが求めているのはその手の笑い話か二流の怪談なんだ。</p>
<p>P 59 11 12 私たちは</p> <p>P 59 14 「記号とは</p> <p>P 59 15 状況を打破するべく質問した。</p> <p>P 59 17 「それは無理です。</p>	<p>P 55 11 我々は</p> <p>P 55 14 「だから記号とは</p> <p>P 55 15 16 不毛な固まり方を見せ始めた状況を打破するべく隣りから質問した。</p> <p>P 55 17 「いや、それは無理です。</p>
<p>P 55 17 18</p>	<p>つぶけるのです。補入 記憶と同じです。例えば忘れたのにもどうしても忘れられない記憶というのがありますね。それと同じことです」</p>

P 60	4	「可能です」	P 56	2	「うまくいくかどうかはわかりませんが、少なくとも原理的には可能です」
P 60	5	概念的	P 56	3	概念的
P 60	6	概念的	P 56	4	概念的
P 60	7	「たぶんね」	P 56	5	「たぶん原理的には可能です」と僕は答えを機械的に繰り返した。
P 60	8	概念的な記号化	P 56	6	概念的な記号化
P 60	9		P 56	7-8	
		強いライトのせいで僕の頭は痛み始めていた。			強いライトと嫌な臭いのする空気のせいで僕の頭は痛み始めていた。人々の甲高い声も僕の痛みを助長していた。
P 60	11-12		P 56	9-10	なのでしようか」挿入」と司会者がたずねた。何人かのゲストが笑った。
		それは僕の想像力を越えた問題であったし、僕は貧乏な叔母さんひとりを抱えているだけでもう充分だったからだ。	P 56	11-14	僕はそんなことについて考えたくもなかった。僕は自前の貧乏な叔母さん一人を抱えているだけでもう充分だったからだ。だいいち彼らにとってはそんなことは切実な問題ではないのだ。彼らはただ次のコマーシャルの時間が来るまで、何かをしゃべるためにしゃべっているだけのことなのだ。
P 60	14	逃れることができるだろうか？	P 56	16	逃れられるだろうか？
P 60	15	庵まで、何ひとつ変りはしない。	P 56	17	庵に至るまで、状況の根もととはみんなひとつだ。
P 60	17	背負っているわけなのだから。	P 56	19	背負っているのだから。
P 61	5	「だって今週はピンクの傘立て風の気分なんだから」	P 57	3	「来週はブリティッシュ・グリーンでいくぞ」
P 61	6-7	可愛い女の子たちだつて声をかけてくれたかもしれない。「ねえ、あなたの傘立てつとでも素敵よ」			削除
P 61	8-9		P 57	4-5	
		潜り込むことは、彼女たちにとつてもきつと素晴らしい経験になったことだろう。	P 57	6-7	僕や僕の背負った叔母さんに対する世間の興味は
P 61	11-12				削除
		そしてついには少しばかりの悪意だけを残してすっかり消え失せてしまった。	P 57	8	抱きはしないのだ。
P 61	13	抱きはしない。	P 57	10	深い沈黙だった。
P 61	15	沈黙だった。			
P 62	4	僕たちは	P 57	13	僕らは
P 62	6-7		P 57	13-14	
		「少し疲れていたみたいね」			秋の初めだ。挿入」時間はあっという間に過ぎてしまった。そんなに長く彼女に会わなかったのは初めてのことだった。
		「そうだね」	P 57	15-16	「少し疲れていたみたいだったけど」 「とても疲れてたんだ」と僕は言った。

	P 58 2 僕は背いた。 挿入 そう、たしかに僕は僕らしくなかった。
P 62 11-12 「あなたもとうとう自前の貧乏な叔母さんが持てたらしいわね」 「らしいね」	P 58 3-4 折り疊んでいた。 挿入 折り疊んではのぼし、のぼしては折り疊んだ。まるで時間を戻したり進めたりするみたいに。
P 62 14 気分だよ	P 58 5-6 「どうやらあなたもとうとう自前の貧乏な叔母さんが持てたらしいわね」と彼女は言った。 「どうやら」と僕は言った。
P 63 3 「少しずつね」	P 58 8 気分だよ P 58 12 「少しはわかってきたと思う」と僕は言った。「少なくとも、少しはわかりかけてきたと思う」
P 63 5 僕は小さく首を振った。	P 58 14 僕は言つて、小さく首を振った。
P 63 5 もう、ずっと書けないかもしれない	P 58 14-15 書こうという気がおきないんだ。あるいはもうずっと書けないかもしれない
P 63 7-8 「なんだか小説を書く意味なんて何もないような気がするんだ。君がいつか言ったように、僕に何ひとつ教えないんだとしたらね」	P 58 17-18 「君がいつか言ったように、僕に何ひとつ教えないんだとしたら、僕が貧乏な叔母さんについて何かを書く意味なんてどこにあるだろう？」
P 63 13 思いつく	P 59 2-3 「そうよ」 挿入 と彼女は言った。「質問しなさいよ。私が貧乏な叔母さんについて何かしやべつてもいいというような気分になることは、もうこの先二度とないんだから」
P 64 4-7 世の中はきつと何百万万という数の理由であふれてるのよ。生きるための何百万万もの理由、死ぬための何百万万もの理由、そんなものひとつ山いくらで手に入るわ。でも、あなたの求めているのはそんなものじゃないんでしょ？」	P 59 4 それを思いつく P 59 9 てね 挿入 改行 彼女は何度か背いた。良い質問だとも言うように。 P 59 13-16 世の中には何百万という結果のための何百万万という数の理由があふれてるのよ。生きるための何百万万もの理由とか、死ぬための何百万万もの理由とか、理由をつけるための何百万万の理由とか。そんな理由なんて、電話一本かければひとつ山いくらで簡単に手に入るのよ。でも、あなたの求めているのはそんなものじゃないんでしょ？」
P 64 9-10 「あととはあなたがそれを受け入れるかどうかってこと」	P 59 17 僕は言った。 挿入 「それとは違うと思う」 P 59 18-19 1 「あなたはそれを認めて、受け入れなくちゃいけない。理由も原因も、そんなものはどうでもいいことなのよ。貧乏な叔母さんはただそこに存在するのよ。貧乏な叔母さんというのは、その存在そのものが理由なのよ。私たちが特別な理由も原因もなくこうして今ここに存在しているのと同じことなのよ」
P 64 11 僕たち	P 60 2 僕ら P 60 4 質問してくれないの？ 挿入 と彼女は言った。
P 65 7-8 オレンジみたいに叔母さんを	P 60 5 何が見える？ 挿入 と僕は訊いてみた。 P 60 13 叔母さんをオレンジみたいに

<p>P 65 13 ステイールみたいな</p>	<p>P 60 19 ステイールで作ったみたいな</p>
<p>4 P 66 14 僕は飽きもせずと窓の外の風景を眺めていた。</p>	<p>P 61 13 僕は窓の外の風景を飽きもせずと眺めていた。</p>
<p>P 67 1 通路を隔てた向いの座席に</p>	<p>P 61 15 向いの座席に</p>
<p>P 67 2 年上の女の子は</p>	<p>P 61 15-16 母親の左側に座った年上の女の子は</p>
<p>P 67 3-8 つばは柔らかなカーブを描きながら上にそり曲がり、帽子はまるで小さな動物のように彼女の頭の上でそっと休んでいた。母親と彼女にはさまれるようにして、三歳ばかりの男の子がいかにも退屈そうに腰を下ろしていた。どこの電車でも見かける平凡な親子連れだ。とくに美しくもなければと醜くもない。金持というほどでもないし、かといって貧乏なわけでもない。僕はあくびをひとつしてからもう一度頭の中をからっぽにすると、顔を横に向けたまま行きとは反対側の風景を眺めつづけた。</p>	<p>P 62 1-6 つばのついた、感じの良い帽子だった。母親の右側には三歳くらいの子が腰を下ろしていた。彼らはとくにこれといって人目を引くような特徴を持たなかった。顔立ちも身なりもごく普通だった。母親は大きな荷物を持って、疲れた顔をしていた。でも大抵の母親は疲れた顔をしていても、通路を隔てた僕に彼らのことをほとんど気に止めなかった。彼らが電車に乗り込んできて、通路を隔てた僕の向い席に座ったときに一度ちらりと見ただけだった。そのあと僕は下を向いてずっと文庫本を読んでいた。</p>
<p>P 67 9-P 68 2 彼ら三人のあいだに何かが起こりはじめたのは十分ばかりあとのことだった。押し殺したような母娘の切れぎれな会話が僕をふと現実にはひき戻した。時刻はもう夕暮に近く、古い車内灯が三人の姿を古い写真のように黄色く染めていた。</p>	<p>P 62 7-16 でもやがてもそもそという女の子の音が僕の耳につくようになった。彼女の声には何かを訴えかけるような切迫した苛立ちがこめられていた。</p>
<p>「だってママ、私の帽子が……」 「もうわかったから大人しくしてらっしゃい」 女の子は口に出そうとしたことを呑みこんだまま不服そうに黙った。まんなかになつた男の子が、さっきまで姉の頭に載っていた帽子を手にとりて両手でぐいぐいと力まかせにひっぱっていた。</p>	<p>「だってママ、私の帽子が……」とその女の子は言った。 「黙ってらっしゃい」と母親はびしょと言った。 女の子は何か言おうとしたが、そのことを呑みこんだまま不服そうに黙った。母親を挟んで座った男の子が、さっきまで姉の頭に載っていた帽子を手にとりて両手でぐいぐいまわしていた。女の子は手をのばしてそれを取り戻そうとしていた。でも男の子は体をかわして絶対にそれを放そうとしなかった。</p>
<p>「黙ってらっしゃいって言ったでしょ」 「だってもう、あんなにくしゃくしゃになっちゃって……」</p>	<p>「ねえ、帽子が駄目になる」と女の子は泣き出しそうな声で言った。</p>
<p>P 68 3-9 母親は男の子をちらりと眺めてから面倒臭そうにため息をついた。母親はきつと疲れているんだらう、と僕は想像した。月賦の支払いや歯医者への請求書やあまりに速く進みすぎる時間が夕暮の彼女をすっかり押し潰してしまっただらう。</p>	<p>P 62 17-P 63 6 母親は面倒臭そうに男の子の方をちらりと眺め、お座なりに手をのばして帽子を取り上げようとした。でも男の子は両手でぎゅっと帽子を握ったまま頑固に放さなかった。母親はそれであつさりとおきらめた。しばらくそのまま帽子で遊ばせておきなさい、どうせ今に飽きるから、というようなことを母親は娘に言った。女の子はそんなことはとても承服できないという顔をしていた。でもとくにそれに対して口ごたえはしなかった。口ごたえしても叱られるだけだということがわかっているのだ。彼女はぎゅゅと唇を結んで、弟の手の中の帽子を覗んでいた。母親はそのあいだずっと雑誌を読んでいた。しばらくすると、男の子はこんどは帽子についた赤いリボンをひっぱり始めた。母親の無関心さが彼を増長させているようだった。彼はリボンをいじることが姉を苛立たせることを知っているのだ。それがわかっ</p>
<p>ていて、彼はわざとリボンをひっぱっていた。それは本当に意地の悪い行為だった。僕でさえ少し腹が立った。よほど立ち上がって男の子の手から帽子をもぎとってやるるかと思つた</p>	<p>た。それがわかっ</p>

P 68 10—12	女の子の方もしばらく思い悩んだ末に、僕と同じ結論に達したようだった。彼女は突然手を伸ばして弟の肩をつきとばし、相手がひるんだすきにさっと帽子をひったくると、弟の手の届かないシートの上に置いた。	P 63 7—9	くらいだった。
P 68 15	この子の方が先に……	P 63 11—12	でも男の子は泣きやまなかった。
P 68 17	顔を背け、シートの上の帽子をじっと覗みつつづけていた。	P 63 13	私の帽子が……と女の子は言った。
P 69 2	伸びた	P 63 14	子供じゃないからね」挿入 と母親は言った。
P 69 6—7	彼女は自分が本当に家庭から放逐されたのかどうか判断しかねている様子だった。	P 63 15	顔を伏せ、自分の帽子をじっと見た。
P 69 7—8	彼女は膝のまんなかに乗せた帽子のつばのしわを思いつめたようにひっぱりつつづけていた。	P 64 1	そして膝の上に置いた帽子のつばを指で撫でていた。
P 69 8—9	もし本当に追い出されたんだとしたら、と彼女は考えていた、私はこれからいっただい。	削除	
P 69 10—11	赤い頬	P 64 2	頬
P 69 12—P 70 4	彼女は平凡な顔立ちの少女だった。おそらく彼女をとりまく平板さがまるで煙のようにならぬ顔に浸み込んでしまったのだろう。ふつくらとした表情に漂うこの年代の少女特有の透明感も、思春期を迎えるころには鈍い肉づきの中にすっかり消え失せてしまうことだろう。僕には彼女のそんな姿を、帽子のしわを伸ばしながら少女から大人へと成長していく姿を想像することができた。	P 64 1—2	方なんだ。挿入 と彼女は思っていた。
P 69 10—11	僕はガラス窓に頭をもたせかけたまま目を閉じて、これまでで巡り会ってきた何人かの女友たちの顔を思い浮かべてみた。そして彼女たちが残していった切れぎれな言葉や、なんでもない仕草や、涙や足首の形を思い浮かべてみた。彼女たちは今、いったいどのような人生を辿っているのだろうか？ あるいは彼女たちの何人かは暗闇の中で逃げまどいながら夜の森の奥へ奥へと吸い込まれていく子供たちのように、知らず知らず暗い道を辿りつつづけているのかもしれない。	P 64 2	帽子のリボンをもぎとろうとしてたんだもの。
P 70 4—10		P 64 4—14	

<p>P 71 8 やつと片づいた 9 16</p>	<p>P 70 14 17 17 P 71 4</p> <p>そして僕は突然気づく。貧乏な叔母さんが僕の背中からいつの間にか消え去っていることに。</p> <p>彼女はやつてきた時と同じように、誰に気取られることもなく僕の背中からそっと立ち去っていた。これからどこに行けばいいのか僕にはわからない。砂漠のまんなか立った一本の意味のない標識のように僕はひとりぼっちだった。僕はポケットの</p>	<p>P 70 14 17</p> <p>階段を下り改札を抜け、夕暮の郊外電車の呪縛、あの黄色い車内灯の呪縛からやつと僕は解き放たれる。不思議な気持だ。体の中から何かがすっぽりと抜け落ちてしまったような……。僕は改札口の脇の一本の柱にもたれかかったまま様々な色あいのそれぞれの殻にくるまれた人々の群れが、川の流れるのように僕の前を通りすぎていくのをしばらく眺めていた。</p>	<p>そんな漠然とした悲しみが、車内灯の黄色い光の中に蛾の銀粉のように舞っていた。僕は膝の上で両手を広げ、長いあいだふたつの手のひらを眺める。まるで何人も血をたつぷり吸い込んだように、僕の手は暗く汚れていた。</p> <p>僕は隣りてしゃくりあげている女の子の肩にそっと手を置いてみたかったのだけれど、僕の手はきつと彼女を怯えさせてしまいうに違いない。僕の手はこのまま永遠に、もう誰ひとり救うこともできないのだから。彼女の灰色のフェルト帽のつばをなおしてやるができないように。</p>
<p>P 65 10 P 66 1</p>	<p>P 65 8 六時に？ P 65 9 それをやつと片づいた</p> <p>と僕はびっくりして訊いた。</p>	<p>P 64 17 P 65 5</p> <p>それから階段を下り改札を抜けたところで、僕は突然気がついた。貧乏な叔母さんが僕の背中から消え去っていることに。</p> <p>いつ彼女が消えてしまったのか、僕にはわからなかった。彼女はやつてきた時と同じように、誰に気取られることもなく僕の背中からそっと立ち去っていた。彼女はどこか知らないけれど彼女がそもそも存在していた場所に戻り、僕はそもそも僕の自身に戻っていた。でもそもそも僕の自身がよく似た別の僕自身のようにも感じられた。これからどうすればいいのか、僕にはわからなかった。砂漠のまんなか立った文字の消えた標識のように、僕はまったくのひとりぼっちだった。そして方向を見定めることができなかった。僕はポケットをさぐって、</p>	<p>時刻はもう夕方方に近かった。車内灯のぼんやりとした黄色い光がまるで哀しげな蛾の鱗粉のようにあたりをちりちりと舞っていた。それは宙を漂い、人々の鼻や口から音もなく体内に吸い込まれていった。僕は本を閉じ、膝の上に両手を置いて、長いあいだ自分の手のひらをじつと眺めた。自分の手のひらをそんなにじつくりと見るのは、考えてみればずいぶん久しぶりのことだった。車内灯のくすんだ光の下では、僕の手はいやに黒ずんで汚れていた。それは自分の手には見えなかった。そのことは僕を哀しい気持にさせた。その手はどう見ても、この先誰かを幸せにできるような手には見えなかったからだ。誰かを救うことができる手のように見えなかったからだ。僕は隣りの席でしゃくりあげているその女の子の肩に手を置いて慰めてやりたかった。君のやったことは全然間違っていない、帽子を奪い取ったときのあの手際なんて実にたいしたものだと言っちゃたかった。でももちろん僕は彼女に手も触れなかったし、何も言わなかった。そんなことをしたら、彼女はもつと混乱してもつと怯えてしまったことだろう。それにだいいち、僕の手はこんなに黒く汚れてしまっているのだ。</p> <p>近づいていた。挿入 僕はしばらく冬のコートについて考えていた。新しいコートを買うべきかどうかといったようなことだ。</p>

<p>P 72 17 書かれた小説が</p>	<p>P 72 7-12</p> <p>そして電話が切れた。僕は手に持った黄色い受話器をしばらくじっと眺めてから静かにもとに戻した。おそろしく腹が減ったような気がする。無性に何かを食べたかった。彼らが僕に何かを与えてくれるなら、僕は地面に這いつくばり、彼らの指までしゃぶるかもしれない。</p> <p>いいとも、僕は君たちの指をしゃぶろう。そしてそのあとで、雨ざらしの枕木みたくぐっすりと眠ろう。</p> <p>僕はターミナル・ピルの窓に寄りかかり、煙草に火を点けた。</p>	<p>P 72 3-4</p> <p>「とにかくあとよ。少し眠らせて。少し眠って起きれば、きっと何もかもうまくいくと思う。わかった?」</p>	<p>P 71 17 それとも欠伸をしただけのことなのかもしれない。</p> <p>P 72 2 「どれくらいあとで?」</p>	<p>悪かったな」と僕は言った。「ただ本当に君が生きているかどうか確かめたかったんだ。うまく説明できないんだけど」</p> <p>彼女は小さな声で笑った。</p> <p>「生きてるわよ。生きつづけるために一所懸命働いて、おかげで眠くて死にそうよ。これでいい?」</p> <p>「一緒に食事でもしないか?」</p> <p>「悪いけど何も食べたくないの。今はただ眠りたい、それだけよ」</p> <p>「君と話したかったんだ」</p>
<p>P 67 5 書かれた貧乏な叔母さんたちのための小説が</p>	<p>P 67 4 政府があり、挿入 役場があり、</p> <p>P 66 12-P 67 1</p> <p>彼女はもう一度「おやすみなさい」と言って電話を切った。僕は手の中の黄色い受話器をしばらく眺めてから、静かにもとに戻した。電話を切ると急におそろしく腹が減った。気が狂いそうなのど空腹感だった。何でもいいから無性に何かを食べたかった。口に入るものなら何だつて構わない。彼らが僕に何かを与えてくれるなら、僕は地面に這いつくばり、彼らの指までしゃぶるかもしれない。</p> <p>いいとも、僕は君たちの指をしゃぶろう。そしてそのあとで、雨ざらしの枕木みたくぐっすりと眠ろう。誰が蹴飛ばしても、僕はもう起きない。僕は一万年ぐっすり眠るのだ。僕は電話機に寄りかかり、頭を空っぽにして、目を閉じた。何万人という人々の足音が波のように僕を洗っていた。人々はどこまでもどこまでも歩きつづけていた。ざくざくざくざくと彼らは歩を刻んでいた。貧乏な叔母さんはいったいどこに戻っていったのだろうと僕は思った。そして僕はいつたいていどこに戻ってきたのだろう?」</p>	<p>P 66 9-11</p> <p>挿入 でも彼女は一瞬迷った。「ねえ、それ何か急ぎの話なの?」</p> <p>「急いでない」と僕は言った。「とくに急いでいるわけじゃない。あとで構わない、そう、時間ならものすくすくいっぱいあるのだ。一万年でも二万年でも。僕はいくらでも待てる。」</p>	<p>削除</p> <p>P 66 2-3 彼女は唇を噛み、小指の先を眉毛に当てた。僕にはそれを感じることができた。</p> <p>P 66 4-6</p>	<p>悪かったと思う」と僕は言った。「こういう言い方は変かもしれないけど、ただ本当に君が生きているかどうか確かめたかったんだ。正直に言えば」</p> <p>電話の向う側に僕は彼女の静かな微笑みを感じることができた。</p> <p>「わざわざ尋ねてくれてありがとう」と彼女は言った。「大丈夫、生きてるわよ。生きつづけるために一所懸命働いて、おかげで眠くて死にそうなのよ。これでいい? 安心した?」</p> <p>「安心した」と僕は言った。</p> <p>「ねえ」と彼女は打ち明けるように言った。「生きるのってけっこう大変なのよ」</p> <p>「そうだね」と僕は言った。たしかにそのとおりだ。生きるというのはけっこう大変なのだ。</p> <p>「よかつたら、これから一緒に食事でもしないか?」と僕は尋ねた。</p> <p>「悪いけど何も食べたくないの。今は何も考えずぐっすり眠りたい、それだけよ」</p> <p>「僕もべつに腹は減ってない」と僕は言った。「ただ君と話したかったんだ。いろいろ話すことがあるから」</p>

P 73
2 | 8

必要とは感じないかもしれない。政府も電車も小説も……。

彼女たちは巨大な酢の瓶をいくつも作り、その中に入れてひっそりと生きることを望むかもしれない。空から眺めると、そんな瓶が何万本、何十万本と見渡す限り地表に並んでいることだろう。それはきつと素晴らしい眺めであるに違いない。

そうだ、もしその世界に一片の詩の入り込む余地があるとすれば、僕は詩を書いてもいい。貧乏な叔母さんたちの桂冠詩人だ。

悪くはない。

P 67
7 | 13

まったく必要とはしないかもしれない。政府も電車も小説も。

彼女たちはむしろ巨大な酢の瓶のようなものをいくつも作って、その中に入れてひっそりと穏やかに生きることを望むかもしれない。空から眺めると、そんな瓶が何万本、何十万本と見渡す限り地表に並んでいるのが見えるだろう。それはきつと息をのむような美しい眺めであるに違いない。

そうだ、もしその世界に一片の詩の入り込む余地があるとすれば、僕はそれについて詩を書いてもいい。そして僕は貧乏な叔母さんたちの世界の、榮譽ある最初の桂冠詩人になるのだ。

悪くない、と僕は思う。